

上益城郡教科等研究会（中学校社会科部会） 平成28年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

課題追究の中で達成感を味わえる授業をめざして

2 研究経過

	期日	活 動 内 容	活動場所
第1回	5/26（火）	第一回上益城郡教科等研究会中学校社会科部会（半日） 昨年度反省、本年度研究テーマ協議、研究組織づくり等	嘉島町立 嘉島中学校
第2回	8/18（木）	第二回上益城郡教科等研究会中学校社会科部会（一日） 教材開発に係る地域巡検（山都町：馬見原商店街他）	山都町商工 会蘇陽支所
第3回	1/27（金）	第三回上益城郡教科等研究会中学校社会科部会（半日） 研究授業 単元：地理的分野「東北地方」 授業者：御船町立御船中学校 岸谷 祐太朗 教諭	御船町立 御船中学校

3 研究の概要

(1) 研究の内容

研究テーマ「課題追究の中で達成感を味わえる授業をめざして」のもと、「課題設定の工夫」と「資料の精選と工夫」の2つを実践項目の柱として研究に取り組んだ。

8月の地域巡検では、三分野において授業の題材、資料の開発につなげることを意識して見学、研修を行った。馬見原商店街の研修では「街づくりにおける行政の在り方と住民の努力」、「西南戦争と地域のつながり」を、片倉ブルーベリー園では「地域の自然を生かす農業の在り方」、「街の活性化と産業」とそれぞれの場所で教材につながる内容を研修することができた。

山都町馬見原は古くより日向往還の宿場町として栄え、山間部にもかかわらず、かなりの賑わいを見せていた。その名残が今も残っているが、商店街の存続と更なる活性化のために、商店街の人々の思いや奮闘、そして具体的な取組を知ることができた。この「街づくり」の取組を、公的分野の「地方自治」の単元で、題材として扱った。「馬見原商店街の取組をさらに活性化させるには」という課題を設定し、追究していった。その中で、子どもたちは「効率」と「公正」の見方で街づくりについて考えていくことができた。自分たちに身近な事例を題材とし、課題を設定することで生徒の学習する意欲向上につながった。

その他にも、馬見原商店街に残る遺跡の中には、西南戦争に関するものが多くあり、歴史的分野の「西南戦争」の授業の導入において、写真資料として活用した学校もある。その他、地理的分野「農村と町おこし」の授業では、導入の部分で、研修で得た情報を資料として提示するなど、実際の授業に活用することもできた。

研究授業および授業研究会では、2年生地理的分野「東北地方」より、東北地方の農業の特色について取り扱い、研究テーマと重点実践内容にせまることができた。授業ではいくつかの課題も見られたが、一人ひとりの授業につながるすばらしい検証授業であった。詳しくは後述する。



【山都町商工会での研修】



【馬見原商店街での視察】



【片倉ブルーベリー園での研修】

(2) 成果と課題（○成果 ●課題）

- 目的を意識した地域巡検により、実際の授業に活用できる情報を収集し、資料として扱うことができた。
- 地域巡検で得た郷土資料は、予想以上に生徒の思考活動を深めることが分かった。
- 授業実践において、視覚的教材や実物を用いることで、生徒の学習内容に対する関心を高めることができた。特に、導入での視覚的教材の効果的な活用は、生徒に問題意識を持たせることができた。
- 授業実践において、板書の構造化を図ることができた。板書が構造的であれば生徒の思考を深めることができることも検証できた。
- 資料の精選を意識して取り組んできたが、資料を扱う際は、その資料が本時の目標にせまることのできる最良の資料かを吟味する必要がある。また中心資料をどのように板書し、活用していくかも考える必要がある。
- 授業実践を通して、「話し合い活動」については、どの学校も課題であることがわかった。今回、研究授業を行った岸谷教諭の授業では、話し合いの流れやスタイルは確立されており、生徒による活発な話し合い活動がなされていた。だからこそ、深まりのある話し合いとなるよう、教師のコーディネートが必要であることがわかった。
- 学習のねらいと、本時の目標、めあての整合性については課題が残る。教材研究の時点で、本時の授業の目標とねらいを明確にし、丁寧な授業づくりを行う必要うがある。

4 実践事例

(1) 授業の概要

2年生地理的分野「東北地方」の単元の研究授業を御船町立御船中学校の岸谷祐太郎教諭が行った。学習課題を「東北地方の農業の特色を説明しよう」とし、「東北地方の人々が、稲作を発展させるために、厳しい環境に立ち向かってきた工夫を、伝統行事や品種改良をもとに説明できる」というねらいにせまった。授業内容において、特に意識されていたのは次の4点である。

- ① 視覚的教材を工夫して提示し、東北地方の農業の特色について関心と疑問を持たせる。
- ② 自分の考えを自分の言葉で伝える場を意図的に設定し、学びを深める。
- ③ ヒントカードを活用して、どの子どもも理解できるようにする。
- ④ 板書の構造化を図り、生徒の思考の深まりを促す。

①について、導入部分では、東北地方の祭りを大型テレビで提示し、祭りの臨場感を味わわせることにした。生徒たちは、一気に題材にひきこまれ、「祭りの目的」を考えていた。展開部後半では、東北地方の米を炊飯器で炊いたものを用意し、生徒たちに試食させた。実物の効果はたいへん大きく、お米のおいしさから品種改良の工夫などを知ることができた。更なる改善案として、実物を登場させる際に、もっと東北地方の人々の思いや、米作りの情熱が伝わるような提示の工夫を行うと良かったという意見が出された。



【実際にお米を食べる生徒】

②については、自分の考えを自分の言葉で伝える場面が積極的に取り入れられており、多くの成果を感じることができた。展開部前半の「予想場面」では、生徒たちが室内を自由に動きまわって、自分の考えを述べ合う姿が見られた。グループ活動の中でも、生徒たち同士が積極的に意見を述べていた。全体での発表の場面では、ホワイトボードに書いた意見を全体に示し、はっきりと自分の考えを述べていた。発表する生徒の意見も授業者の意図的指名により、より思考が深まっていく順に発表するなど、工夫がされていた。更なる改善策として、生徒同士のねりあいが進むような教師のコーディネートが必要だという意見が出された。



【自由に意見を述べ合う生徒】



【立場に分かれて意見を述べる】



【班内での活発な意見交換】



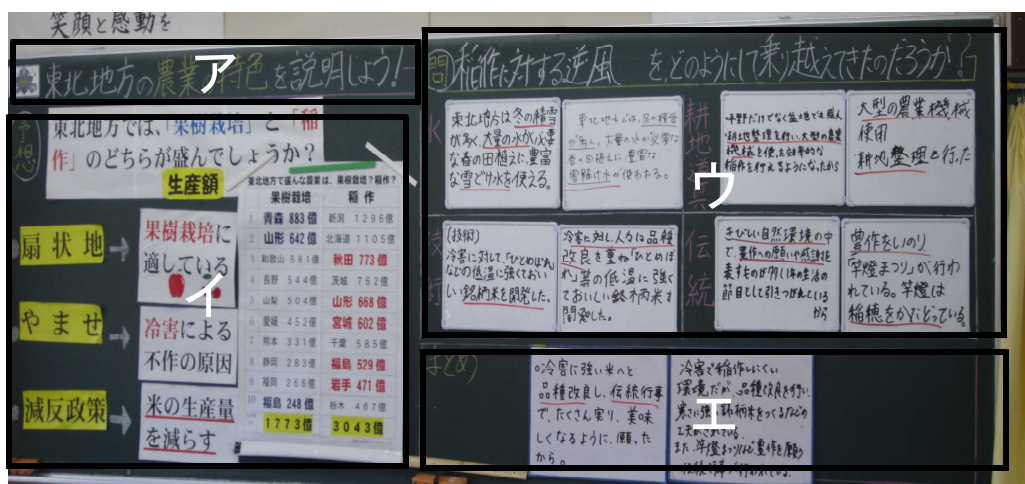
【全体での意見発表】

③については、室内の後方にヒントカードを置き、子どもたちが自由に振り返ることができる工夫がなされていた。また、教室の壁面にも、これまで学習した事柄のまとめが掲示してあり、いつでも基礎的・基本的事項が振り返られるようになっていた。更なる工夫としては、ヒントカードも生徒の実態に応じていくつかのパターンがあつてよいのではないかという意見が出された。



【ヒントカードの活用】

④について、岸谷教諭の授業では板書の構造化がなされ、生徒の思考を促すのに大いに役立っていた。



ア：本時のめあて

イ：活用する語句や資料

ウ：班の意見

エ：本時のまとめ

【構造化された板書】

(2) 授業研究会

ワークショップ形式の授業研究会では、活発な協議がなされた。特に協議の中心となったのが「課題設定」と「発問の吟味」である。本時の授業では、「東北地方の農業の特色を説明しよう」を課題としたが、目標と授業内容の整合性から「東北地方の米作りの特色を説明する」の方が、より目標にせまることができるのではという改善策が出された。また、「稲作に対する逆風をどのように乗り越えてきたか」という中心発問に対しては、「逆風」とは、自然環境のことを含めるのか、外国からの輸入品との兼ね合いのことを言うのか、目標との整合性を考えながら言葉を使う必要があるとの意見が出された。



【活発な協議会】